

旧制高等商業学校におけるスペイン語教育：山口高等商業学校の事例¹

坂野 鉄也

はじめに

戦前期の高等教育機関のひとつである高等商業学校ではスペイン語が教授されていた。これはあまり知られていない事実である。スペイン語教育史においても高商史においても片隅に追いやられた歴史の一頁である。スペイン語教育史の戦前に関する記述においてはどうしても、外国語を教えることを目的とした外国語学校に注目が集まる。日本におけるスペイン語教育が高等商業学校、のちの東京高等商業学校、東京商科大学（一橋大学の前身）に始まることが語られても、その後の様子や後続の高商での展開についてはかろう触れられる程度にとどまる²。たほう、高商史研究においては教育内容の分析にまで踏み込むにいたっていない³。なかでも、外国語教育に対する関

¹ 本稿は、2010年度滋賀大学教育研究プロジェクトセンター「20世紀前期日本の高等商業学校スタディーズ・プロジェクト」による山口大学、小樽商科大学での調査に基づく。山口大学の調査では経済学部附属東亜経済研究所および図書館の職員の方々にお世話になった。また、小樽高商関連史資料については、平井孝典氏（小樽商科大学百年史編纂室研究員）にご教示・提示いただいた。ここに記して感謝の意をあらわす。

² たとえば、児玉 悦子 「我が国に置けるスペイン語教育の歴史と現在」 『桜美林エコノミクス』 第32号、1994年、81-99頁。この論文においては明治から「太平洋戦争」までの期間にかんする記述はおよそ9頁、全体の半分を占めるが、高商におけるスペイン語教育にかんする記述は、スペイン語教育の端緒についての東京高商に関する記述を除くと、わずか一段落、4分の1頁分にすぎない。東京外国語学校および大阪外国語学校にそれぞれ一章が充てられるのとは対照的である。ちなみに、東京外国語学校にスペイン語部が設置されたのは、1885（明治18）年にいったん廃校となったのち、再設立された1897（明治30）年のことである。このとき、日本人教員が見つからず、探しに探したうえで委嘱したが、東京高等商業学校でスペイン語を学んだ檜山剛三郎であった。東京外語スペイン語部同学会 『東京外語スペイン語部八十年史 別巻——人物と業績』、1982年、12-13頁。ただ第一次開校時の1873（明治6）年にもスペイン語部を置く構想がなかったわけではない。児玉と同様に草創期のスペイン語教育について論じた浅香武和によれば、第一次開校時の教則第7条に「此学校ハ多ク英、独逸、仏、櫓、支那語ヲ置ク雖モ伊班亜、伊太利亜、蘭、其余ノ語等モ或ハ置クトモアルヘシ」との記述がある。浅香 武和 「日本におけるスペイン語教育の創始者」 『イスパニア図書』 3、2000年、86頁。また大阪外国語学校には設立当初より「スペイン語科」が設置されていたが、設立年は1921（大正10）年である。

³ 2011年1月22日に滋賀大学経済学部でおこなわれた「20世紀日本の高等商業学校スタディーズ」シンポジウムにおいて阿部安成は、近年の高商史の動向を踏まえつつ、今後の高商史研究のありかたの一つとして、生徒＝「高商における諸相の結節点」ととらえ、「教員から生徒へ」と視点を移動することを提起した。

心は低く、スペイン語が教授されたことに触れる研究はほとんどない⁴。しかし、戦前においてスペイン語をカリキュラムに加えていた高等教育機関のじつに半数以上を高商・商大が占めていたのであり、スペイン語を学んだ旧制の大学生・専門学校生の大半は高商生であった⁵。

この事実を前に、高商においてスペイン語クラスが開講された理由やその教授内容を山口高等商業学校を事例として探ることが本稿の目的である。とはいえ、本稿の試みは戦前期の高等教育史と現代における外国語教育に対する問いかけでもある。戦前の高等教育機関についていえば、旧制高等学校から帝国大学へと進む道と旧制専門学校との大きく二つの系統があったにもかかわらず、教育社会学者の天野郁夫が述べたように、「旧制専門学校は、忘れられた学校」であった⁶。戦前期の専門学校と戦後に生まれた専門学校とはまったく別のものであるが、大学よりもいちだん格の低い学校と見なされている点で両者は共通している。そうしたイメージゆえか、ともに官立でありながら高等学校や大学には光が当てられるものの、官立専門学校にはあまり目が向けられてこなかった。とりわけ、新制大学が生まれるさいに、単科大学になることの少なかった商業、農林業などを教えた旧制専門学校の歴史は新制大学の前史として後景へと押しやられてしまっている。またスペイン語は、現在では英語の陰にかくれ

⁴ 例外としてあげられる研究に以下がある。松本睦樹・大石恵 「旧制長崎高等商業学校における教育と成果——明治・大正期を中心として」 『経営と経済』 第85巻第3・4号、2006年2月、234-262頁。これは、教育課程という視点を取った結果、外国語教育にも目を向けるにいたっている。また、戦後に編まれた大学史の高商に関する記述のなかでカリキュラム変更について述べられるばあい、スペイン語教育に触れられることはあった。しかし、スペイン語開講の背景については簡単に触れられるに留まるか、まったく述べられない。たとえば、『旧富山大学50年史』第Ⅱ部部局編 経済学部 第1章 官立高岡高商の設立から転換まで 第4節 開校10周年記念事業、521-522頁。これについては後段で引用する。また、山口大学30年史編集委員会編 『山口大学三十年史』 第一章 山口大学前史 第三節 経済学部前史 3. 山口高等商業学校の発展 (4) 教育方針の特質と教育内容の拡充、1982年、52頁。

⁵ 『学校一覧』によれば、いわゆる「内地」にあった官立商大・高商13校のうち8校、東京、神戸、山口、長崎、小樽、横浜、高松、高岡でスペイン語が開講されたことがわかる（ただし、長崎・高松の両高商については学校一覧の選択外国語に「西班牙语」の記載はあるものの、職員欄には西班牙语担当教員の名が記されていない）。『学校一覧』は、滋賀大学経済経営研究所に所蔵されている（一部、特に高商の『学校一覧』についてはデジタル化もなされており、簡便にアクセスできるようになっている <http://mokuroku.biwako.shiga-u.ac.jp/eml5.asp?mode=gakko>）。また、商大・高商以外では、東京・大阪の官立外国語学校と宇都宮高等農林学校、私立では、拓殖大学、天理語学専門学校（のちの天理大学）、横浜専門学校（のちの神奈川大学）のみであった。児玉 悦子 「我が国に置けるスペイン語教育の歴史と現在」、90頁。および、児玉 悦子 「西和辞典の過去と現在」 『国士館大学教養論集』 第47号、1999年、103頁。

⁶ 天野 郁夫 『旧制専門学校論』 玉川大学出版局、1993年、11頁。

てしまっている「第二外国語」であり⁷、これまた格の低いものと見られている。こうした幾重にも陰のかかった真っ暗な場所から日向を眺めてみたら過去の姿は変わって見えるであろうし、何か新しいものが見えてくるかもしれない。

第一章 高等商業学校でスペイン語教育がおこなわれた理由

(1) 東京高等商業学校

如上のとおり、スペイン語教育は商法講習所に端を発する高等商業学校で1892（明治25）年に始まった。そのときなぜスペイン語が教えられるようになったのかについてはこれまで明らかにされてこなかった。わずかに知りえるのは、日本最初のスペイン語教員がエミリオ・ビンダというイタリア人であること、ビンダはその二年前の1890（明治23）年3月に高等商業学校の教務嘱託、同年12月1日付けで外国人教師となり、イタリア語とドイツ語を教えた人物であったことのみである⁸。スペイン語が高等商業学校で開講されるにいたった経緯はなにか、なぜイタリア人がスペイン語を講じたのかについては考察されることはなかった。

しかし、スペイン語教育の発端について論ずる児玉悦子も浅香武和もスペイン語教育が開始された理由を暗示する論述をしている。児玉は「実用語学」という外国語教育におけるスペイン語の位置づけを確認したうえで、スペイン語教育の歴史を論じている⁹。また浅香は、ビンダが1893（明治26）年に設立された「西班牙学協会」の創立決議会に参加していること、「西班牙学協会」の設立には同じ年に誕生した「殖民協会」の会長でもある榎本武揚が関係していることを述べ、ビンダを追うという形ながらも、当時の時代背景へと筆を進める¹⁰。

また浅香は、なぜイタリア人なのかという問いに対する答えもほのめかしている。ビンダの人物紹介の部分で、ビンダがスペインのマドリードで私立学校を開き、イタ

⁷ 「第二外国語」とは、一般的に、中学・高等学校などにおいて学習した英語（第一外国語）に対し、大学で新たに学習を始める外国語をさす。また、戦前期においては英語、ドイツ語、フランス語が「教養語学」とされるのに対し、中国語、ロシア語、スペイン語などは「実用語学」とされた。児玉 「我が国に置けるスペイン語教育の歴史と現在」、83頁。

⁸ 浅香 「日本におけるスペイン語教育の創始者」、88-89頁。児玉 「我が国に置けるスペイン語教育の歴史と現在」、83-85頁。

⁹ 児玉 「我が国に置けるスペイン語教育の歴史と現在」、83頁。

¹⁰ 浅香 「日本におけるスペイン語教育の創始者」、90-91頁。

リア語、フランス語、ラテン語を教授し、以来パリ、ベルリン、サンフランシスコの諸学校で語学教師を務めたという人名事典の記述を引いており、多言語を解し、語学教育に長けていることを示している¹¹。さらに、「西班牙学協会」の発起人がイタリア学者でもあった曲木如長であることも述べ、イタリア人とスペイン語とのつながりを暗示している。

両者の論述はいずれも、点と点とのあいだに破線がぼんやり引かれているにすぎない。そもそもいずれの論者も、なぜ明治20年代なのか、なぜスペイン語なのか、なぜイタリア人なのかといった問いを立てているわけではない。こうした観点に興味を持たなかったのか、あるいは、なおさまざまな調査・研究が必要であるため、留保したのであろう。ここでも未調査・未検討の点が多くはあるが、破線をすこし明確にすることを試みる。それは山口高商においてスペイン語が開講された理由を考えるうえで重要と思われるからである。

「(東京)高等商業学校」において¹²、スペイン語が教授されるようになった背景には大きく二つの点が考えられる。まずひとつは、外国人教師ピンダにかかわるべきごとであり、もうひとつは、すでに浅香が示唆している明治20年代の時代状況である。

(東京)高商教員としてのピンダの地位はかならずしも安定したものではなかった。1890(明治23)年12月1日付けで外国人教師となり、最終的には1902(明治35)年に没するまでその地位にあったものの、ほかの高等商業学校の事例に照らせば、契約は毎年更新という形がとられたものと思われる¹³。それにとどまらず、スペイン語が開講されることとなる1892(明治25)年には、雇用契約更新がおこなわれない可能性さえあった。これは高等商業学校の事情ではなく、国からの予算支出にかかわる問題である。1892(明治25)年5月31日付けの「衆議院議事速記録第十五号」には、高等商業学校で雇用する外国人教師3名から1名を減員するという意見への反論

¹¹ 浅香 「日本におけるスペイン語教育の創始者」、88頁。

¹² 1902(明治35)年に第二の官立高等商業学校が神戸に設立されるまで、「高等商業学校」は一枚しかなかった。スペイン語が開講されたのは「高等商業学校」であったのだが、のちに設立された高等商業学校と区別するため、変則的であるが、「(東京)高等商業学校」と表記する。

¹³ 山口高等商業学校に在籍した外国人教師の事例に照らすと、一年ごとに契約の更新がなされたと考えてよいであろう。これは、山口高商庶務課が発行した、人事等を含めた学校内のさまざまな情報が掲載された『校内報』によって確認できる。『校内報』は山口大学経済学部東亜経済研究所の書庫に所蔵されている。

が記載されている¹⁴。減員の標的となっていたのはイタリア人教師、つまり、ビンダであった。その論拠とされたのは、イタリア語を高等商業学校で教授する必要はないのではないかということであった。それは、速記録のなかで反論者がイタリア語の必要性を説いていることから推察される。もしイタリア語が不要であるとの意見がとおっていたならば、ビンダは解職されたであろう。イタリア語とドイツ語を教授していたものの、ドイツ語のみであれば彼である必要はない。残る2名のいずれかの外国人教師がドイツ語も担当することは難しいことではないであろう。外国人教師の減員については、事前に高商にも伝わっていたかもしれない。それを踏まえて、ビンダにさらにほかの言語を担当できないか、という照会がおこなわれた可能性はある。如上的とおり、ビンダはスペインで語学学校を開設した経験も有しており、スペイン語を教授する能力はじゅうぶんであっただろう。そもそもイタリア語とスペイン語では、文字と音の関係に若干の相違があるものの、文法、語彙の点でほとんど相違がない。イタリア人であり、マドリッドに学校を解説した経験をも持つビンダにとって、スペイン語を担当に加えることは難しいことではない。

ビンダの解職を避けるためにスペイン語が開講された可能性とともに、明治20年代前半にはそれを後押しするような、スペイン語に対する需要が生まれつつあった。すでに述べたように、浅香は1893（明治26）年に「西班牙学協会」「殖民協会」が相次いで創設されたことを指摘している。彼が引く「西班牙学協会」設立時の新聞記事には発起人曲木如長の言がある。それは、明治20年代前半の時代状況をみごとに伝えている。まず曲木は、海外移民事業が増大していることをあげ、メキシコとの修好通商条約が結ばれたことによってメキシコへの渡航志望者が増えていることを述べる。日墨修好通商条約が結ばれたのは1889（明治22）年のことである¹⁵。また、マニラに定期航路が開設され、渡航者が増えていること、それにとどまらずほかの南洋諸島への探検や貿易を企てるものがあることを付言している。そしてそれらはいずれもスベ

¹⁴ 帝国議会議事速記録については、以下による。「帝国議会議録検索システム」http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/cgi-bin/TEIKOKU/swt_logout.cgi?SESSION=14923

¹⁵ 「日墨修好通商条約」は日本がアジア諸国以外で初めての平等条約であった。

イン語を使用する国々であり¹⁶、英語やフランス語を解するものは社会上層のみであるとする。したがって将来、探検や移民、そして海外との貿易に従事することを希望するものは、スペイン語をまず最初に学習すべきであると曲木は結論づけている¹⁷。じっさい、1891（明治24）年にはときの外務大臣榎本武揚の指示により、メキシコを含む移住地調査がおこなわれている。また1895（明治28）年には、第八回帝国議会衆議院において「海外移住殖民に関する決議案」が可決されている。決議のなかで移住適地に選ばれたのは、メキシコ、ブラジル、ニカラグア、グアテマラなど中南米諸国であった¹⁸。ブラジルを除く中南米地域の大部分はスペイン語圏であり、移植民調査や事業を推進するばあい、スペイン語の学習が必要となるという曲木の言は適切といえる。そして、榎本武揚を中心に進められることになる海外移住・植民という政策や考え方は、内国植民論（北海道植民）から海外植民論への移行という思想転換でもあり、明治20年代はまさにその時期にあった¹⁹。

明治20年代に興隆したもうひとつの思想的潮流には「南進論」がある。「南進論」は、政治的・軍事的色彩の濃い「北進論」との対比で言えば、通商拡大、移民、資源獲得といった経済的性格が強い。「北進論」が領土の獲得を含めた「陸」の思想とたとえるならば、「南進論」は領土獲得というよりは通商・移民に力点を置いた平和的貿易思想、つまり「海」の思想であった²⁰。中南米諸国を「南進論」の対象とするという発想は一般的ではないが、「海」の思想としてみるならば、南進の延長線上に中

¹⁶ フィリピン、グアムは、19世紀末に起こった米西戦争におけるアメリカ合州国の勝利によってその統治下におかれるまで、スペインの植民地であり、スペイン語を公用する地域であった。フィリピンにおけるスペイン語の位置づけは、日本の統治下におかれたさいにも大きな変化はなかった。1942年に邦字紙マニラ新聞が大阪毎日新聞社、東京日々新聞社が経営するマニラ新聞社より創刊されたが、従前からある英語紙、タガログ語紙と並び、スペイン語紙の発行も継続された。新聞記事「マニラ新聞創刊」 大阪毎日新聞 1942年11月3日。以降の新聞記事については、以下による。神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ【新聞記事文庫】<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/> アクセス日：2011年1月14日。

¹⁷ 浅香 「日本におけるスペイン語教育の創始者」、90頁。

¹⁸ 第8回帝国議会衆議院 第五十二號 明治28年3月23日 (http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/cgi-bin/TEIKOKU/swt_dispdoc.cgi?SESSION=15272&SAVED_RID=1&PAGE=0&POS=0&TOTAL=0&SRV_ID=1&DOC_ID=3496&DPAGE=1&DTOTAL=2&DPOS=2&SORT_DIR=1&SORT_TYPE=1&MODE=1&DMY=15285 アクセス日：2011年3月5日)

¹⁹ 黒田 謙一 『日本植民思想史』 弘文堂、1942年、242-247頁。矢野 暢 『日本の南洋史観』 中公新書549、1976年、17-18頁。角山 幸洋 『榎本武揚とメキシコ殖民移住』 同文館、1986年、8頁。

²⁰ 大畑 篤四郎 「南進論の系譜」 矢野 暢編 『講座 東南アジア学 第10巻 東南アジアと日本』 弘文堂、1991年、34頁。矢野 暢 『「南進」の系譜』 中公新書412、1975年、54頁。

南米諸国を措定することは可能であろう。また矢野暢によれば、「南進論」には二つのコースがあった。沖縄、台湾、華南そして外南洋へと向かう「第一線」と小笠原諸島、南洋群島（内南洋）あるいはフィリピン、そして大洋州へと向かう「第二線」である。明治期の「南進論」はおもに「第二線」であり、「第一線」に比して、「探検、移民、貿易というかたちで出るにふさわしいコース」であった²¹。実際に実現するか否かはべつとしても、「第二線」が主要であるならば、中南米諸国までを視野に入れていた可能性はじゅうぶんある。

中南米諸国へと向かっていく海外植民論や「南進論」はいずれも明治20年代に興隆した思想であった。そうした状況下でスペイン語の需要が生まれた。また二つの思想的潮流がともに通商・移民に力点を置いた考え方であることを踏まえると、高等商業学校とスペイン語との結びつきはきわめて妥当であろう。この時代背景に加えて、（東京）高商にはスペイン語も教えることのできるイタリア人教員がいた。彼の雇用を確保するためにもスペイン語クラスの開設がおこなわれたと考えることもできよう。

（2）山口高等商業学校

1892（明治25）年に（東京）高等商業学校でスペイン語教育が開始された経緯については、なお推測の域をでない。同様に、1938（昭和13）年にスペイン語が開講された山口高商のばあいも明確な理由はわかっていない。しかし、おおよそ1930年代に横浜（開講年：1929〈昭和4〉年²²）、高岡（同：1930〈昭和5〉年）、小樽

²¹ 矢野 『日本の南洋史観』、12頁。

²² 横浜高商でのスペイン語開講年は完全には特定できていない。スペイン語を担当した岡田峻の着任時期が確認できていないためである。ただ岡田は、横浜高等商業学校でのスペイン語教育を担っていることを理由として、1929（昭和4）年6月26日付けで「勤務演習及簡閲点呼召集免除」とされている。「横浜高等商業学校学校助教授岡田峻以下召集免除の件」 国立公文書館デジタル・アーカイブ (<http://www.digital.archives.go.jp/index.html> アクセス日：2011年1月19日)。したがって、昭和4年4月の時点ですでに着任した状態にあるはずである。ちなみに横浜高商では、南米との通商に従事する人々に向けた、スペイン語またはポルトガル語を必修とする「殖民別科」が1929年に設置されている。岡田は1925（大正14）年に東京外国語学校を卒業しているが、軍籍（昭和5年度『学校一覽』には「陸軍伍長」と記載されている）を持っていることもとも考慮すれば、遅くとも1929（昭和4）年にスペイン語が開講されたと考えるのは妥当であろう。

(同：1936〈昭和11〉年)の計3校でもあいついで開講されており²³、この時期になんらかの時代的要請があったと考えられる。

たとえば、高岡高商の後身である富山大学で編まれた大学史によれば、スペイン語の開講を以下のように説明している。

「新学科課程は只見〈初代〉校長在任中、商業教育に対する時代の要求として、当時の『海外発展という国策』に順応するため、海外経済事情を必修科目とし、南米への進出を想定しスペイン語を増設、その他科目全般にわたる改正を計画し、改正案を文部省に申請、認可されたため新学年から実施された。」²⁴

(〈〉および下線は引用者による。)

また、小樽高商のばあいには、スペイン語開講時に教員へのインタビューをした学生新聞の記事がある。そこでは、インタビューにさきんじて、以下のような記述が付されている。

「巨大なる寡頭金融資本の漸く確立せられた時低コストと優秀なる技術と云ふ武器を翳して、或るは微妙なる国際金融情勢の中に巧に為替安の波に乗り第三期症状を表した英国資本主義の牙城に迫るメイドインジャパンは当に世界の驚異的存在であろう。メイドインジャパン嬢の赴く處既にあらゆる政策的衝突の渦の巻き起こされつつある事は現時の国際、的〈ママ〉諸会議に明瞭に反映されて居る植民地再分割問題的意義を含めての日本のラテン諸国植民地への発展は列強の脆弱地への挑戦である、最後の餘地としての中南米南洋市場は眼前に置かれた重要な

²³ 註5にも記したが、このほかに、長崎、高松の両高商は『学校一覧』でのみ開講が確認できる。管見のかぎり、それぞれの高商の『学校一覧』に最初にスペイン語が記載されたのは、長崎1929(昭和4)年、高松1926(大正15)年である。ただし長崎については、1923(大正12)年とする指摘もある。松本・大石 「旧制長崎高等商業学校における教育と成果」、249頁。また東京外語スペイン語部同窓会の出版物には、横浜高商の岡田峻が高松高商での開講に携わり、のちには、1929(昭和4)年に東京外国語学校を卒業した大倉敏之が着任したという記述もある。河村 功 「母校スペイン語部八十年の歩み」東京外語スペイン語同窓会 『東京外語スペイン語部八十年史——内外活動異色ドキュメント』 1979年、48頁。河村 功 「畏友水谷清氏を語る」東京外語スペイン語同窓会 『東京外語スペイン語部八十年史 別巻』、115頁。なお、大倉はそののち、外務省に転じたようである。河村 功 「ラテン・アメリカ外交に活躍した同窓群像」 『東京外語スペイン語部八十年史』、516頁。さらに、『学校一覧』では確認できないが、和歌山高商においても、1926(大正15)年度よりスペイン語が第二外国語のひとつに加えられる予定だったようである。1925(大正14)年に東京外国語学校スペイン語部を卒業した玉木勝夫は、「大正15年春から新設の当時の和歌山高等商業学校のスペイン語の助教授にとの長屋順耳〈東京外国語学校〉校長のお推挙をお断りしてお叱りを受けたことは未だに忘れることができません」と記している。玉木 勝夫 「スペイン語と私——東京外語西語部貿易科在学三年間を顧みて」 『東京外語スペイン語部八十年史 別巻』、298頁。

²⁴ 『旧富山大学50年史』第Ⅱ部部局編 経済学部第1章 官立高岡高商の設立から転換まで 第4節 開校10周年記念事業、521-522頁。

る経済闘争の舞台である。

斯くの如き発展途上にある国際貿易に使用せられる商業語の在意義たるや誠に推すに難くない此處に此の重大なる国際的役割を果さしむる商業語のひとつとして本校新たに新設せられた事は益々本校の特色を發揮せしむると共に貿易事業の将来に貢献する所大なるを期して止まない。」²⁵

(〈〉および下線は引用者による。)

つまり、1930年代当時、中南米諸国は日本が進出可能な市場として想定されていたのである。これを裏づける新聞記事もある。1933（昭和8）年7月22日づけの大阪朝日新聞には「中南米から我が綿布に買気：最近商談頗る活発」という記事が掲載されている。「八方塞がりのわが輸出綿布の新市場として中、南米が囑目されているが、最近同方面からの加工綿布に対する輸出商談がとみに好転し不振の業界に一脈の光明を与えている、これは従来同方面をほとんど独占していた米国綿布がインフレ景気のため値上りを来し、輸出商談の成立困難となったため、中、南米諸国の買気が日本に転向して来たものである。」という内容である。また、翌年2月28日づけの東京日日新聞には、それを数字で裏づける「中南米新市場へ：驚異的綿布輸出増加」という記事も掲載されている。これによれば、昭和9年の年初から2月中旬までの加工綿の輸出は、総量じたいは前年と変わらないものの、南米向けでは207%、中米向けでは565%も前年比増となっている²⁶。

さらに、1930年代前後の日本の経済状況と中南米諸国との関係について知るうえで、貴重な史料を山口大学経済学部東亜経済研究所の書庫に見いだした。日本中南米輸出入組合連合会発行の『昭和18年度 中南米年鑑』（昭和18年11月25日発行〈非売品〉）である。そのなかに「第IV編付録 1. 日本中南米輸出入組合連合会事業史」があり、同連合会の沿革が記されている。はじめは、1931（昭和6）年、日本政府が金の海外輸出を再禁止したことにあった。そのため円安が進み、輸出への追い風が吹いたのである。そこで目をつけたのが、中南米市場であった。「中南米諸国の産業は著しく幼稚で、半製品完全製品は全部海外に依存して居り、且つ既に古くより政治

²⁵ 「南進論はスペイン語から」 『小樽高商緑丘新聞』 第96号、昭和11年11月5日。『小樽高商緑丘新聞』は「緑丘アーカイブズ」 (<http://archives.ih.otaru-uc.ac.jp> アクセス日：2011年1月19日) による。

²⁶ 昭和一桁年代は、中南米への移民が戦前期のなかでもっとも活況を呈した時期でもある。その主たる移住地は、ポルトガル語圏のブラジルであったが、年間2万人以上の人々が中南米諸国へと渡った。「明治21年～昭和20年までの中南米への移住者数」 今野敏彦・藤崎康夫編 『移民史 第1巻 南米編』 新泉社、1984年、308-309頁。

的、財政的、経済的に米英の勢力下にあり、輸入品は殆んど米英品に依って占められて居たが、良質にして低廉なる日本品はよく中南米諸国の需要に応へ、其の輸入は加速度的に累加され、輸入数字は増大の一途を辿った」。しかし、中南米諸国から日本へ輸入できるもの、つまり日本の工業製品の原材料がなく、しかも1934（昭和9）年末には、中南米諸国では「経済上の国民主義の台頭」があった。そのため、商工省が主催し、日本綿糸布亜米利加輸出組合、日本絹人絹糸布輸出組合、日本雑貨中南米輸出組合の三団体と外務省が加わって、対中南米貿易振興協議会が1935（昭和10）年2月に設立された。同協議会を母体として、同年11月16日に日本中南米輸出入組合連合会が創設された。1937（昭和12）年7月の盧溝橋事件をきっかけとして日中が交戦状態に入ると、「外貨獲得の為の有力な輸出市場保持」のために中南米市場への注目が高まった。さらにヨーロッパで第二次世界大戦が始まると、「重要物資の分散買付の必要が叫ば」れるなか、中南米市場が原材料供給地として官民の関心を集めた²⁷。つまり、1930年代をとおして中南米諸国は日本の輸出入市場としてつねに注視されていたのである²⁸。

中南米地域への市場としての関心が財界からの教育界への要請へとつながったことはじゅうぶん考えられよう。具体的な要請がなかったとしても、1929（昭和4）年スペイン語またはポルトガル語を必修とし、中南米地域との通商に従事する人々のために「殖民別科」が横浜高商に設けられたことは、企業活動の最前線に立つ人材を輩出する高商が中南米地域への経済的関心の高まりを受け止めたことのひとつのあらわれとも考えられる。この別科開設に続き、横浜高商本科、高岡高商、小樽高商、そして、山口高商でスペイン語が開講されたのである。

²⁷ 「第III編 附録 1. 日本中南米輸出入組合連合会事業史」 水谷 清編著 『昭和十八年版 中南米年鑑』 1943年、789-790頁。中南米諸国との輸出入にかんしては、それを維持するための工夫がなされた。日本中南米輸出入組合連合会の母体となったそれぞれの組合に対応して、綿糸布、絹人絹、雑貨の三品目の輸出に対しては調整金を徴収した。これは、相手国が要望するものの、日本が不要とする品々の犠牲買付をおこなったさいに生まれる損失を補填するためであった。大芦 嘉三郎 「明治・大正・昭和を語る」 『東京外語スペイン語部八十年史』、66頁。

²⁸ 中南米諸国は経済的関心を集めるのみならず、外交上も重要な地域であった。日本が世界で孤立するなかで1932年に建国した満州国を日本に次いで承認したのは、中米の二国、エルサルバドルとコスタリカであった。また第二次世界大戦が始まったのちは、世界のさまざまな情報を収集する場としてチリという国が利用されていた 川崎 栄治 「国際外交六十年苦楽談」 『東京外語スペイン語部八十年史』、156-157頁。

第二章 高商におけるスペイン語教育

(1) 教員養成の母体：東京外国語学校

おおよそ1930年代に、4つの高商にあいついでスペイン語が開講された。その教育を担ったのは、いずれも東京外国語学校出身者であった。また、1921（大正10）年から1935（昭和10）年のあいだ、東京商大でスペイン語を教えたのは、東京外国語学校西班牙語科第一回卒業生で、当時、東京外国語学校教授の地位にあった金澤一郎であった。高商のスペイン語教育を支える人材を輩出した東京外国語学校での教育は高商でのスペイン語教育の形を規定することにもなったと考えられる²⁹。そこでまず、東京外国語学校におけるスペイン語教育を概観しておく。

1897（明治30）年に東京外国語学校が再設立されると同時に生まれた西班牙語科（のちに西班牙語部に変更）の歴史は、おおまかに前期（1897〈明治30〉年～1918〈大正7〉年）と後期（1919〈大正8〉年～1940〈昭和15〉年）に分けられるであろう。1918・19年を画期とするのは、如上の金澤一郎が母校の教授に就任したのが1919年だからである。前期と後期との区分はおおよそ、東京外国語学校以外でスペイン語教育を受けたものが教官の中心であった時期と卒業生が中心となって教育をおこなった時期とに対応している。

前期、それも草創期の教育は、手探りでおこなわれたという印象をうける。日本語で書かれたものは教科書も辞書もなかった。日本人教員は、英語で書かれた教則本を底本として教授し、暗唱を中心に授業が展開された。いっぽう外国人教員は、英語で教授し、それを筆記させるという形で授業を進めていった。学生はというと、スペイン語の単語を調べるために、まず西英辞典を引き、そののち、英和辞典を引いた³⁰。

²⁹ 神戸高商・神戸商業大学のスペイン語教員も東京外国語学校卒業生の佐藤久平と坂本静雄であった。高橋 正武 「自明治廿年至昭和廿年西班牙語学」 『東京外語スペイン語部八十年史』、256頁。また佐藤久平は、1921（大正10）年に創設された大阪外国語学校のスペイン語部の初代担当者でもあった。高商・商大のみならず、天理外語、拓殖大学、宇都宮高等農林という戦前期にスペイン語を開講していた高等教育機関におけるスペイン語教育の礎を築いたのはすべて東京外国語学校の卒業生であった。河村 功 「母校スペイン語部八十年の歩み」、48頁。

³⁰ 永田 寛定 「日本スペイン語学の先駆者たち——篠田賢易・村上直次郎・金澤一郎・三浦荒次郎・野田良治・外人教師たち」 『東京外語スペイン語部八十年史 別巻』、15頁。中川 清によれば、国立国会図書館に所蔵されている明治期のスペイン語学習書は明治30年に出版された、C・イニーゴ 『スパニシエ會話』（丸善）から明治40年出版の戸谷松太郎 『日西會話書（商人・興業家・労働者）』（雲梯舎）までの計7点のみである。いずれも「現在の新書版といった小型本がほとんどである。従って、その内容も粗雑なものが多い」。中川 清 「明治期におけるスペイン語及びスペイン文学への関心（II）」 『国士館大学教養論集』 第36号、1993年、44-45頁。

この事実から推察すれば、外国語を体系的に学ぶという形式にはほど遠いものであったろう³¹。

そうした状況にすこしでも風穴をあけようとしたのが、二人の日本人教員であった。篠田賢易（在職期間：1899〈明治32〉年10月～1918〈大正7〉年12月）と村上直次郎（在職期間：1903〈明治36〉年1月～1908〈明治41〉年7月）である。

篠田の最大の功績は、テキストを作成したことである。彼は旧制松山中学卒業ののち、日本駐在中のフランス人外交官の侍僕となり、外交官の帰国に付きしたがいフランスに渡り、そののち、アルゼンチンに移った。帰国後の1899（明治32）年10月に東京外国語学校西班牙語科講師の職をえている。フランスやアルゼンチンでどのような教育を受けたのかまったくわかっていないが、着任ののち、自らのメソッドにもとづいて読解と会話のテキストを手ずから作り、授業をおこなったとのことである。そのテキストは1915（大正4）年に活字本『西語初歩（LIBRO DE LECTURA Y CONVERSACIÓN）』として印刷された³²。

このテキストには戦前期のスペイン語教授法を考えるうえで重要な示唆が含まれている。テキストのスペイン語タイトルにも示されるように、彼は読解（LECTURA）と会話（CONVERSACIÓN）を担当した。いっぽう、文法の説明はというと、外国人教員が担ったそうである³³。これは今日のスペイン語教育とは対照的である。現在では文法の説明を日本人教員が担当し、会話は外国人教員がおこなうのが一般的である。読解・会話に比重を置くという傾向は戦前期のスペイン語関連出版物にも見てとることができる。国立国会図書館に現存する明治期に出版された学習書7点のうち1書

³¹ とはいえ、1919（大正8）年に卒業した笠井鎮夫（のちの東京外国語学校・東京外国語大学教授）によれば、週に30時間の授業時間のうち、1年生のばあい、23、4時間がスペイン語にあてられており、語学力は自然についたとのことである。笠井 鎮夫 「遺老残筆 苦楽四十年——外語生活の回顧と展望」『東京外語スペイン語部八十年史』、119頁。昭和14年度版東京外国語学校一覧にもとづいて記述した、河村功の手による「史実概観」によれば、1年生は週20時間、2～4年生は、文学・法律・貿易・拓殖科という学科による違いはあるが、週13～17時間、専攻外国語を学んだ。河村 「母校スペイン語部八十年の歩み」、8頁。なお、東京外国語学校は1927（昭和2）年度より3年制から4年制に変更された。

³² 永田 「日本スペイン語学の先駆者たち」、17-19頁。

³³ 永田 「日本スペイン語学の先駆者たち」、19頁。

を除いてたすべてに、「会話」という語が含まれている³⁴。草創期のスペイン語教育では「実用」が目標とされ、会話例の暗唱に力点がおかれた様子がみえてくる。

テキスト作成に加え、篠田のもうひとつの、そして村上直次郎の功績は辞典編纂に着手したことである。スペイン王立アカデミーが編纂した大辞典にもとづき、篠田が西和を、村上は和西をそれぞれ担当した。村上は、帝国大学大学院を終えた歴史研究者であり、のちに南洋史学の泰斗となった人物である。彼は1898（明治31）年に文部省から南洋語および同地理歴史研究のためオランダ・イタリア・スペインに3年間の予定で派遣されが、滞蘭中に東京外国語学校西班牙語科教授就任の打診をうけた。すぐさまスペインへ移動し、スペイン語を学び、1902（明治35）年12月に帰国した。翌1月より西班牙語科主任教授の任に就いたが、そのさいに西和辞典がないことが学習の障碍となっていることを痛感した。そこで辞典編纂を文部省に具申したのである。ところがその意見はなかなか聞き入れられず、最終的に編集事務助手の経費がついたのが1907（明治40）年のことであった。そこから村上は篠田とともに辞典編纂に着手したのである。しかしながら、この事業は道半ばで頓挫した。まず、村上が1908（明治41）年7月に東京外国語学校校長となり、事業を離れざるをえなかった。篠田はそののちも続けたものの、1918（大正7）年に早世した。篠田が担当した西和部門で完成したのは、Fの部の半ばまでであった³⁵。

事業そのものは霧散してしまったものの、両名の辞典編纂は編集助手としてかかわった東京外国語学校卒業生の村岡玄に引き継がれた。とはいえ、なんら公的支援がえられないなかで私人がこつこつと積みあげる仕事となり、日本初の本格的西和辞典が出版に至ったのは1927（昭和2）年のことであった。しかも、東京西班牙語学会発行となっているが、じつたいは自費出版であった³⁶。

この村岡『西和』に先駆けて辞典を出版していたのが、後期の中心人物である金澤

³⁴ C・イニーゴ 『スパニシエ会話』、片桐安吾 『日本西班牙会話編』、岡崎隆一 『日西会話編』、金澤一郎 『西班牙語会話編』、黛太郎 『スペイン語会話編（墨西哥南米諸国）』、戸谷松太郎 『日西会話書（商人・興業家・労働者）』であり、岡崎屋書店編 『西班牙語独習』のみ「会話」という語を持たない。児玉 「西和辞典の過去と現在」、99-100頁。中川 「明治期におけるスペイン語及びスペイン文学への関心（II）」、44-45頁。

³⁵ 永田 「日本スペイン語学の先駆者たち」、21-22頁。ちなみに、村上が最初にスペイン語を学んだのは、帝大の学生時代、（東京）高商で開講されていたスペイン語クラスを聴講に行っていたときであった。永田 「日本スペイン語学の先駆者たち」、27頁。つまり、村上もビンダの教え子の一人であった。

³⁶ 児玉 「西和辞典の過去と現在」、101-102頁。

一郎である。1919（大正8）年には『和西新辞典』、4年のちの1923年には『西日辞典』をそれぞれ出版している。金澤は、1900（明治33）年に卒業したのち外務省に入省するものの、年末には助教授として母校に戻った。そして、1907（明治40）年まで教鞭をとったが、その年、東洋汽船株式会社に移った³⁷。東洋汽船は1905（明治38）年12月に南米航路西海岸線を開いたばかりであり³⁸、さっそく、社命を帯びて南米各地を出張した。帰国したのは、1915（大正4）年であった。帰国ののちは、母校の講師を兼務したが、篠田の急逝ともう一人の教授永田寛定（1909〈明治42〉年卒）の留学が決まっていたため、1919（大正8）年に教授として復帰することになったのである³⁹。

彼の復帰は東京外国語学校に新しい時代をもたらすとともに、日本におけるスペイン語教育を拡大する契機となった。上述のとおり金澤は、永田がスペイン留学を終え帰任した1921（大正10）年から東京商大に出講しスペイン語を担当しはじめた。ビンダが没した1909（明治35）年以降、東京高商のスペイン語教育がどのようになっていたのかということは未確認であるが、金澤は1921年から1935（昭和10）年まで東京商大への出講を続け、商大本科ならびに附属商業専門部でスペイン語を教授した。そしてもちろん、退官となる1940（昭和15）年まで東京外国語学校においてスペイン語運用能力を伝授しつづけた。

金澤はまた、旺盛な執筆活動によってスペイン語を一般に普及させることにも努めていた。先の『和西新辞典』『西日辞典』以外にも、『西語会話篇』（1905〈明治38〉年）、『日西会話』（1908〈明治41〉年）、『西語動詞字彙』（1909〈明治42〉年）、『西語研究』（1933年〈昭和8〉年）などがある。永田の評によれば、これらの書籍や辞典は「初歩文法と日用会話を親切に手引き」しており、特に辞典二書は、「戦前の初学者にとって手頃だったし、したがって便利だったことは確かである」とされる⁴⁰。

³⁷ 永田 「日本スペイン語学の先駆者たち」、29-30頁。高橋 「自明治廿年至昭和廿年西班牙語学」、261-262頁。

³⁸ 日本郵船株式会社編 『七十年史』 日本郵船株式会社、1956年、114頁。

³⁹ 永田 「日本スペイン語学の先駆者たち」、29-30頁。高橋 「自明治廿年至昭和廿年西班牙語学」、261-262頁。河村功によれば、金澤は1908（明治41）年の第一回ブラジル移民を乗せた笠戸丸でブラジルにも渡ったとのことである。河村 「畏友水谷清氏を語る」、116頁。

⁴⁰ 永田 「日本スペイン語学の先駆者たち」、30頁。金澤には『ぼるとがる語会話』という著作もある。永田 「日本スペイン語学の先駆者たち」、30頁。

この金澤とともに、後期の東京外国語学校におけるスペイン語教育を支えたのは、金澤の教授就任と同時に助教授として着任した笠井鎮夫である。彼はその年の3月に東京外国語学校を卒業したばかりであった。彼も金澤同様、書籍をつうじてスペイン語普及に努めた人物である。代表的な著作に『西班牙語四週間』（1933〈昭和8年〉）、”Primeras Lecciones de Español”（『基礎スペイン語』、1938〈昭和13年〉）があるが⁴¹、大学書林が出版したこの二書は、一般に広く流通されると同時に、スペイン語クラスのある高商に所蔵され、その教育に資したと考えられる⁴²。

金澤、笠井、そして、1921（大正10）年にスペイン留学より帰国した永田の三人こそが後期の中心人物である。この三人に、1931（昭和6）年に最初の四年制課程生として卒業した高橋正武⁴³、外国人教師ホセ・ムニョス（1917〈大正6〉年着任）を加えた5名が後期の東京外国語学校西班牙語科を支えた主要な教員たちであった。のちに高商のスペイン語教員となるものたちはいずれも、彼らからスペイン語を教わったのである。

前期と同様に後期においても、教員間で大まかに役割分担があったようである。ただし前期とは異なり、外国人教員と日本人教員とのあいだの分掌ではない。着任まもない助教授が文法教育を担い、教授が読解・作文などを教えたのである⁴⁴。読解では文学作品が取りあげられるとともに、商業通信文も教授された⁴⁵。1941（昭和16）年3月卒業の原信之助は、笠井の担当した商業スペイン語では彼の著書がテキストとなったことを記しているが⁴⁶、おそらく、1938（昭和13）年に第三書房より出版された

⁴¹ 高橋正武によれば、笠井は戦後も含めると語学に関連するものだけで25点以上を出版している。高橋「自明治廿年至昭和廿年西班牙語学」、264頁。

⁴² 二書はいずれも戦後まで版を重ね、20世紀後半においても標準的なスペイン語学習書であった。

⁴³ 高橋は戦後、白水社より『西和辞典』（1958〈昭和33〉年）を出版するが、1980年代までこれに比する西和辞典はなく、スペイン語学習者必携の辞典であった。また高橋の『西和辞典』以前には、村岡の『西和辞典』しかなく、これで足りない場合には、西英辞典や西西辞典を用いられた。河村 功 「村岡玄著『西和辞典』について」 『東京外語スペイン語部八十年史』、564頁。

⁴⁴ 大正13年に卒業した学生の回顧によれば、彼が文法を教わったのは笠井であり、昭和16年に卒業した学生によれば、文法を担当したのは高橋であった。加藤 平治 「あの頃のこと」 『東京外語スペイン語部八十年史』、196頁。原 信之助 「スペイン語・先生たち・クラスメート」 『東京外語スペイン語部八十年史』、430-431頁。

⁴⁵ 黒髪 繁雄 「Vicisitudes de Mi vida」（邦題：わが人生の盛衰） 『東京外語スペイン語部八十年史』、435-436頁。

⁴⁶ 「〈笠井は〉立派な商業スペイン語の本を出版され、このテキストでわれわれ学生は、初めて将来進むであろう道への道標を建て、頂いた」（〈〉内は筆者による） 原 信之助 「スペイン語・先生たち・クラスメート」、430頁。

『新選西班牙語商業通信』がテキストであろう。とはいえ同じ商業通信文の授業であっても、笠井か金澤かによってテキストも異なっていたと思われる。なお文法についても担当者によってテキストや教授法に違いがあったと考えられるが、笠井は先述の『西班牙語四週間』をテキストとして使用したこともあったようである⁴⁷。高橋も1935（昭和10）年に白水社より『西班牙語文法読本』を上梓しているが、彼は授業では用いていないようである⁴⁸。

授業での使用・未使用はべつとして、文法書や読本が出版されているということは前期との対照的な点である。またそれは、東京外国語学校でのスペイン語教育の充実を意味している。一般に流通する学習書を教員が執筆したということは、スペイン語を日本語で教授する体系ができあがった証左といえるからである。後期の東京外国語学校では、1時限50分の授業が週20回前後あるなかで⁴⁹、一年次で文法が徹底的にたたきこまれ⁵⁰、二年次以降で「読む・聞く・話す・書く」という形で体系的にスペイン語が教授されたことが伺われるのである。

(2) 山口高等商業学校

東京外国語学校で3年間、そして1927（昭和2）年度入学生以降は4年間をかけて、文法や「読む・聞く・話す・書く」ためのスペイン語をみっちり学んだ卒業生のなかからは、商大や高商へ教員として赴任するものもいた。彼らは体系的に身につけたスペイン語能力を高商生へと伝えようとしたであろう。しかし、週20時間前後の時間をかけてスペイン語を学ぶ外語の学生に対する教育システムを、わずか週3時間前後しかスペイン語の授業のない高商にあてはめることはできなかったであろう。東京商大に出校している金澤一郎という先人はいるものの、どのような方法でスペイン語を教えたものか頭を悩ませたに違いない。残念ながら、彼らの苦闘を直接的に知りうる史料

⁴⁷ 江森 武男 「私を変えた一冊の本」 『東京外語スペイン語部八十年史』、407頁。ただし、江森は語学のみを教授する夜間二年課程の専修科卒業であり、本科でも同書が使用されたかは確認できない。

⁴⁸ 大阪外国語学校や天理外国語講習所ではテキストとして用いられたが、「むずかしいという評判」だったようである。高橋 「自明治廿年至昭和廿年西班牙語学」、264頁。

⁴⁹ 一時限が50分であったことは以下に記載がある。高橋 正武 「故山に馬場称徳先生を訪う」 『東京外語スペイン語部八十年史 別巻』、83頁。また、週あたりの授業時間数については、註31を参照のこと。なお、「馬場称徳先生」とは1907（明治40）年に東京外国語学校を卒業し、外務書記生となった人物である。外務省に勤務しながらも母校の講師を兼務したようである。

⁵⁰ 註45にあげた原信之助は、「動詞の変化などは、一年生の間にクラス全員が完全にマスターしたほどだ」と記している。原 「スペイン語・先生たち・クラスメート」、431頁。

はいまのところ見つかっていない。また、スペイン語の授業にかんして学生たちが残した回想もほとんどない。そこでここでは、高商が所蔵したであろうスペイン語関連の書籍データによって、つまりどのようなテキストあるいは参考書が用いられたかをとおして、スペイン語の教授内容を探ることとする。さいわい、山口大学図書館には高商時代の蔵書のみを集約したコーナーが新館4階の貴重書庫にある。以下では、この書庫での調査を中心として、小樽・横浜・高岡高商それぞれの後身である小樽商科大学・横浜国立大学・富山大学に現在、所蔵されている、戦前期に出版されたスペイン語関連図書データも利用しながら、山口高商におけるスペイン語の授業内容を探っていく⁵¹。

まず山口高商の教員であるが、のべ5名のスペイン語講師が着任している。スペイン語が開講された1938（昭和13）年に担当教員として着任したのは、東京外国語学校 西語部貿易科を1936（昭和11）年3月に卒業した鳥羽武であった。彼は大阪の田丸貿易商会から転じ⁵²、1938年3月18日づけで事務嘱託、教務課勤務を命ぜられたのち⁵³、4月に講師を嘱託された⁵⁴。とはいえ、応召のため早くも同年8月26日に山口を離れ、9月1日には「東京麻布区國方部隊田中隊」に入隊した。彼がスペイン語を担当したのは一学期にも満たなかった。その跡を継いだのは、スペイン人のモイセス・ドメンサインであった。辞令がいつ発行されたかはさだかではないが、山口高等商業学校の『校内報』によれば、ほかの二名の講師とともに同年10月1日の就任式に臨んでいる⁵⁵。ドメンサインは1940（昭和15）年6月30日づけで依願によって職を解かれるまで勤務した。彼の後任は、同日づけで講師を嘱託された、スペイン人のペテロ・アルペである⁵⁶。ペテロがいつまで勤務していたのかもさだかではないが、1943（昭和18）年5月1日づけでヨハネ・ビスカラというスペイン人が講師を嘱託されている⁵⁷。

『職員生徒名簿』によればドメンサイン、アルペ、ビスカラの3名とも住所は「山口市

⁵¹ 小樽、横浜、富山の各大学の蔵書については、末尾に付した〈戦前に出版されたスペイン語関連蔵書リスト〉を参照のこと。

⁵² 山口高等商業学校同窓会報 『鳳陽』 第19巻第5号、1938年5月10日。山口大学経済学部附属東亜経済研究所所蔵。以下、註に記すすべての『鳳陽』は東亜経済研究所に所蔵されている。

⁵³ 山口高等商業学校 『校内報』 第120号、1938年4月1日。鳥羽はそののち、教務課から東亜経済研究所に配置換えとなっている。『校内報』 第124号、1938年6月30日。

⁵⁴ 『校内報』 第121号、1938年4月27日。

⁵⁵ 『校内報』 第128号、1938年11月9日。

⁵⁶ 『校内報』 第152号、1940年8月26日。

⁵⁷ 『校内報』 第221号、1943年5月31日。

今首」とある⁵⁸。ビスカラの場合はさらに「カトリック教会」と付されている。したがって、3名ともカトリック教会の聖職者あるいは寄寓した修道士であったかもしれない⁵⁹。鳥羽の出征ののちは、ドメンサイン、アルペの両スペイン人がスペイン語教育を担っていたが、1942（昭和17）年3月31日付けで新たな日本人講師藤原裕正（ふじはら ゆうせい）が就任した⁶⁰。藤原は鳥羽と同期で、1936（昭和11）年に東京外国語学校（現：東京外国語大学）の（現：国際言語学）部貿易科を卒業している。彼は神戸川崎汽船、横浜税関に勤務したのち、山口高商のスペイン語講師となった⁶¹。以上のとおり、山口高商では鳥羽、藤原の日本人とドメンサイン、アルペ、ビスカラのスペイン人の計5名が順次あるいは時期を重ねながらスペイン語教育にあたったのである。

最初に着任した鳥羽が応召して以降、藤原が着任するまでの3年半のあいだ、スペイン語を担当したのは外国人講師のみであったわけだが、それでも大きな支障はなかったと推察される。当時、スペイン語は選択科目のひとつに過ぎず、時間数も一年生が週4時間で二・三年生は週2時間のみであった。しかも選択科目は「外国語または商業経済英書購読」であり、「外国語」には「支那語、独逸語、仏蘭西語、西班牙語」があった。つまりこの時期は、英語以外の外国語を学ぶことは必須ではなく、受講した学生もそれほど多くなかったろう。1940（昭和15）年度の『学校一覽』に記された「昭和十四年度 概況」によれば、ドメンサインが三学年分のスペイン語の授業を担当したとある⁶²。おそらくドメンサインが担当したのは、各学年1クラス、多くとも週

⁵⁸ 『職員生徒名簿』は東亜経済研究所に所蔵されている。

⁵⁹ スペイン語を開講していた官立高商のなかで、山口と同様に、外国人講師・教師を採用していたのは、「殖民別科」を設置していた横浜高商のみである。中南米との通商やその地域での殖民事業にかかわる人材養成を意図していた横浜高商とは異なり、山口の場合、外国人教師の雇用は意図しないことであった可能性もある。最初のスペイン語担当の鳥羽が着任して半年も経たぬまに応召されたため、急遽、講師を探したが見つからず、やむをえず、山口にあったカトリック教会の関係者を講師として採用したのかもしれないのである。ただいっぽうで、『山口大学30年史』のなかでは高商への貿易別科設置にかんする記述において、「1929年（昭和4）になって、未曾有の世界不況を背景として支那はもとよりのこと南アジア、南米の市場開拓が緊急であるとの情勢認識の上に立って、修業年限1年の中学卒業生及びこれと同等以上の学力ありと認められるものを入学資格者とする貿易別科が新設される。」（下線は引用者による。）と書かれており、横浜のばあいと同様に意図的に外国人教師を採用した可能性もある。山口大学30年史編集委員会編 『山口大学30年史』、48頁。

⁶⁰ 『校内報』 第187号、1942年4月8日。

⁶¹ 『鳳陽』 第23巻第8号、1942年8月10日。藤原が採用されたのは、単にスペイン語の授業のためだけではないと思われる。現在の大学とは異なり、旧制高等商業学校においては教員が事務職をも兼ねることもあった。じっさい鳥羽の場合は、事務嘱託兼講師であった。それは藤原の場合も同様で、鳥羽と同じ東亜経済研究所に勤務した。『校内報』 第189号、1942年4月30日。

⁶² 『山口高等商業学校一覽 自昭和十五年四月至昭和十六年三月』、42頁。

8時間程度であったろう。また選択対象科目の「外国語」のそのまたひとつであったスペイン語の授業では、体系的に教えることが求められていなかったかもしれない。

ところが藤原の着任した1942（昭和17）年度からは状況が一変する。「第二外国語」という表現が登場し「第一外国語」以外の外国語が必修化され、「第一部」つまり本科では「支那語、仏蘭西語、独逸語、西班牙語、馬來語」から、「第二部」つまり支那科では「英語、西班牙語、馬來語」からひとつを選択することとなった⁶³。時間数も「第一部」では、一年生が週3時間、二・三年生が週2時間、「第二部」では、すべての学年で週2時間となった。すべての学年で開講されるとなると、少なくとも週13時間となる。また、一年課程の貿易別科では「外国語」週8時間を「支那語、馬來語、西班牙語」から選択することとなっており、スペイン語の教員は、合計週21時間、あるいはそれ以上の授業を担当し、しかも年次に合わせて体系的な教育を施さなければならなくなったのである。

クラスや教育内容をアルペあるいはビスカラと藤原がどのような形で分担したかについては不明である。また、ドメンサインや鳥羽を含めた5名の講師がそれぞれどのような授業をおこなったかについても、山口大学図書館および経済学部附属東亜経済研究所所蔵の史料からはまったくわからない。そこで如上のとおり、山口高商所蔵のスペイン語関連図書にもとづいて、スペイン語教育を可能なかぎり再構成してみる。

山口高商が所蔵したスペイン語関連図書は計17冊である。そのなかには、戦後、連合軍司令部より寄贈された、アメリカ合州国で軍部によって作成された外国語マニュアル2冊も含まれている。これらは高商のスペイン語教育とは直接、関係しないので除くと、残りは15冊となる。その内訳は辞典5冊と学習書10冊で、具体的には以下のとおりである。ただし、辞書2冊と学習書1冊は鳥羽の遺族によって戦後、寄贈されたものである（鳥羽遺族の寄贈本には*を付す）⁶⁴。

〈辞典〉

- ①日墨協同会社編 『西日辞典』 博聞館、1925年。
- ②村岡 玄編 『増補 西和辞典』 東京西班牙語学会、1937年。

⁶³ ちなみに、本科の「第一外国語」は英語、支那科のは、中国語であった。

⁶⁴ 寄贈印は、1949（昭和24）年9月8日付けである。④⑤の辞典は鳥羽が学生時代に手にいれたものであろう。⑥は洋書であり卒業後、入手したものであろうが、講師就任にあたって買い求めたものかもしれない。

③ *Pequeño Larousse ilustrado: Nueva diccionario enciclopédico*, Paris, 1914.⁶⁵

④ * 村岡 玄編 『西和熟語慣用句辞典』 東京西班牙語学会、1928年。

⑤ * 村岡 玄編 『いろは音引き和西辞典』 東京西班牙語学会、1925年。

〈学習書〉

⑥ 坂本 静雄 『実用スペイン語読本』 ヤングメン通信社出版部、1942年。

⑦ 佐藤 久平 『標準スペイン語会話』 白水社、1938年。

⑧ 笠井 鎮夫編著 『実用スペイン語読本』 外語学院出版部、1941年。

⑨ 笠井 鎮夫 *Primeras Lecciones de Español* (『基礎スペイン語 第二版』)

大学書林、1938年。

⑩ 南條 忠雄 『自修者のスペイン語』 太陽堂書店、1939年。

⑪ 藤原 裕正 『南方スペイン語会話』 春陽堂、1942年。

⑫ 村岡 玄 『新エスパニア語文典(完)』 大観堂書店、1940年⁶⁶。

⑬ 村岡 玄 『スペイン語会話文法』 東京西班牙語学会、1928年。

⑭ 進藤 遠著 笠井 鎮夫監修 『入門スペイン語』 三笠書房、1941年。

⑮ * D. Constántino Román y Salamero, *El castellano actual: Lecturas y conversaciones*

castellanas sobre la vida diaria en España y en los países de lengua española para uso de los

que desean conocer la lengua corriente, Sexta edición, cuidadosamente revisado y con

explicaciones del texto, Ettlingen(Baden) und Leipzig: J. Bielefelds Verlag, 1930. (直訳すれ

ば、邦題は以下のとおりである。『今日のスペイン語：現在使用されているスペイン語を学びたい人のための、スペインとスペイン語圏において日常生活に用いられているスペイン語の読解と会話』第6版、慎重に改訂されテキストに説明が付されているもの)

以上15冊の蔵書を、小樽商科大学、横浜国立大学、富山大学の各図書館の戦前期に出版されたスペイン語関連蔵書と比較した場合、注目すべきは⑪の藤原裕正の著作である。その発行は1942年8月15日、ちょうど藤原の着任の年にあたる⁶⁷。高商のスペ

⁶⁵ この辞典には山口高商の分類番号が付されていない。もしかしたら誰かの私物なのかもしれない。

⁶⁶ 「エスパニア語」とはスペイン語を指す。

⁶⁷ 註61にあげた同窓会報の紹介記事にも、発行前であるが、著書として『南方スペイン語会話』があげられている。また同年の第11号には本書を紹介する広告も掲載されている。『鳳陽』 第23巻第11号、1942年11月10日。

イン語担当教員がスペイン語の学習書を執筆、出版する事例はもうひとつある。横浜高商の岡田峻の事例である。しかし、藤原と岡田のばあいには違いが見られる。

まず両書の大きな違いはその所蔵状況である。藤原の著作は本人による寄贈も含め計二冊が山口高商に所蔵されている。それに対し岡田の著作は、少なくとも現在の横浜国立大学にはない⁶⁸。またこの二書について、国立国会図書館のOPACで検索してみると、岡田の著作が所蔵されているのに対し藤原のはない。

藤原と岡田の事例のあいだの相違は、それぞれが自著にたいして異なった位置づけを与えていたことに起因するかもしれない。岡田は自著の序において、「初から今日迄決して万年ノートで教ふべきでない、年々テキストを作つては授業して來た事をすら自ら以て満足してゐる。」と記している⁶⁹。つまり、岡田は執筆した学習書をあくまでも一般向けとし、高商の授業では用いていないと推察される。これとの対比で捉えるならば、藤原の著書はあらかじめ高商向けのテキストとして執筆されたとも考えられる。

そもそも『南方スペイン語会話』は一般向けにはできていない。タイトルに「南方」という語が付されているが、いわゆる「南方」で示される東南アジア地域、太平洋地域において使用されているスペイン語ではなく、中南米地域のスペイン語圏のスペイン語を扱っている⁷⁰。したがって、地域が限定されているのである。また上述の篠田賢易に始まる日本人によるスペイン語学習書の伝統にならって本書も、会話能力の習得を目指しており、形式はテーマごとの会話文例集となっている⁷¹。つまり、中南米スペイン語を実際に使用することを目的として書かれているのである。設定されているテーマは以下の19であるが、いずれも実用向けであることが見てとれる。(1) 挨拶、(2) 外国語、(3) 病気、(4) 気候、(5) カレンダー、(6) 時間、(7) 世界、(8) 人類、(9) 訪問、(10) 食事、(11) 住宅、(12) 衣服、(13) 運動、(14) 娯楽、(15) 買物、(16) 通信、(17) 理髪屋、(18) 時事、(19) 旅

⁶⁸ 校地変更・学制変更等の理由による紛失、図書館への未登録なども考えられるが、スペイン語関連の和蔵書のすべてが岡田の著書(1942年発行)よりも古いにもかかわらず所蔵、登録されていることを踏まえると、岡田の著書がないことから、なんらかの特別な意味があったと推測しても差しつかえないであろう。

⁶⁹ 岡田 峻 『明日へのエスパニア語』 三省堂、1942年、12頁。

⁷⁰ 自序においても「本書ニ於テハ成可ク当り障リノ無イ字句ヲ使用シ且ツ南米特有ノ単語ヲ排列スルニ意ヲ注イダ」と記している。

⁷¹ 岡田の『明日へのエスパニア語』が総合的独習書となっているのとは対照的である。

行⁷²。これらのテーマから見ても⁷³、金澤一郎による序に「著者は〈ママ〉自分の海外生活と実地教育体験から割り出された極めて懇切なる入門書」と書かれていることから見ても⁷⁴、本書は中南米のスペイン語圏で暮らすことを前提として構成されていることを特徴とする。そのためか、スペイン語の学習書でありながらも、特に著者が暮らしたであろうアルゼンチンの首都ブエノスアイレスの気候や習慣にかんする説明が随所にちりばめられている⁷⁵。こうした点からも、本書が高商生、つまり卒業したのち企業の先兵として中南米に渡る可能性がある人々へのスペイン語教育のために執筆されたと感じられるのである。

さらに自序には、藤原自身のスペイン語教育に対する構えも示され、彼の教育観が窺われる。藤原は「西班牙语会話ノ上達ノ方法」として「文章ノ暗記」「口ノ練習」「耳ノ熟練」の三点をあげる。表現を暗記し、それを繰り返し練習するとともに、相手が話していることを聞き取れるようになると理解されるが、これは金澤が言う「実地教育体験」、すなわちスペイン語圏で仕事や生活をするなかで身につけた上達法であろう。

そのいっぽうで藤原の著書には文法上の誤りが散見される。たとえば、35頁に”¿Ha estado Vd. enfermo hace mucho tiempo?”という文例が見られるが、41頁にあるその説明には「haceハhacerノ變化シタモノ、一人称単数直接法現在」とある。これは「三人

⁷² なお、最後の「旅行」は(1)、(2)に分かれており、全体で20課である。また第1課の前に「発音の説明」が付されている。発音には特段の注意が払われており、すべての単語にはカタカナで発音が付されるのみならず、アクセントのある音には英語のアポストロフィのような記号をつけて表している。また、単語の間に縦線を引きプレスマークとしているのも類書になく、著者独特といえる。

⁷³ 「(17) 理髪屋」にいたっては、中南米諸国での滞在の予定がないものにとっては不要としかいいようがない。

⁷⁴ 金澤一郎 「序」、ii頁。これに「殊に我国とラテンアメリカ諸国との交通が再開のときには、本書の需要されることは大袈裟なやうだが、それこそ大旱の雲霓をのぞむが如しと言つて差支えなからう。私は枢軸の勝利に終るこの度の大戦争が日本の国力を中南米諸国にまで伸長せしめる目出度い日の到来することを期待すると共に、本書もその時の東道として更に十分の御奉公をせらむことを祈るものである。」と続く。金澤一郎 「序」、ii-iii頁。本書は、アメリカ合州国との戦争によって中断された中南米諸国との通商再開を展望して作られたことが見てとれる。

⁷⁵ 例えば、82頁には「Buenos Airesハ亜爾然丁國ノ首府デアルガ、其ノ意ハ『良イ空氣』デアル、文字通り住ミ良ク氣候快キ処デアル」とあり、105頁には「亜國首府ノBuenos Airesニ於ケル食事時間ノ一例

desayuno	café con leche (8~9am)
almuerzo	(12am ~ 1pm)
hora de té	(4½pm ~ 5)

cena (comida) (8pm ~ 9pm)」と記されている。

称単数」もしくは「無人称」の誤りである。同じく35頁には、”Se me he notado alguna mejoría.”という文例があるが、文意不明である。”Se me ha notado alguna mejoría.”の誤りではないかと思われる。また、111頁には”Préstame Vd. el fósforo si lo tiene.”と出てくるが、”Présteme Vd. ...”の誤りである。出版社がスペイン語に不慣れであったことによる誤植とも考えられるが、実学的指向、実体験の教育への還元という姿勢が、外国語学習の基本となる文法の軽視と表裏の関係になっていた可能性も否定できない⁷⁶。

ただし、文例の暗記を推奨した藤原といえども、その文例に文法説明を付していることからわかるように、文法をまったく無視していたわけではない。また、初習者、つまり一年生の第一学期から本書を使用したとも考えられない。英語にはない特異な文法用語もあり、本書だけで初習者を教育することは不可能である⁷⁷。草創期の東京外国語学校のように外国人教員が文法教育を担った可能性もあるが、スペイン語担当教員のどちらかが自作のテキストやプリントなどを用い、なんらかの形で文法教育をおこなったと考えられる。蔵書にテキストが含まれているか否かは全く不明であるし、文法教育の内容を推量することは難しいが、文法教育の際に蔵書が参照された可能性は高い。上記⑥～⑮の学習書のうち、⑮は戦後に寄贈されたものであるので、これを除く9冊のうち⑨⑩⑫⑬⑭の5冊が文法を中心に扱った書籍であり、とりわけ⑨⑩⑭は入門者向けの学習書である。残念ながら、限られた調査時間ですべての学習書に目をとおすことはできなかった。しかし、版は異なるものの⑨を入手できたので、以下では⑨に基づいて高商でおこなわれたであろう文法教育を推測していく。

⑨は*Primeras Lecciones de Español* が正式なタイトルであるが、日本語で書かれており、『基礎スペイン語』という邦題でOPAC等に登録されている学習書である。同書は戦前、戦後を通じて大学書林から出版されているが、初版は1938（昭和13）年3月20日づけである。同年に発行されているが、山口高商に所蔵されていたものも、現

⁷⁶ この点は、少なくとも学習書上で文法重視を明言している岡田のばあいと対照的である。ただし、授業中に訂正がおこなわれている可能性は否定できない。

⁷⁷ もちろん、「すべて暗記せよ」という教育方法が取られたばあいにはその限りではない。

在、富山大学に所蔵されているものも第二版とされている⁷⁸。今回、入手できたのは第4版（1951年発行）である。

本書は「第一部 発音篇」10講と「第二部 構文篇」30講の二部構成で、全40講に「序」と「付録 動詞活用一覧表」が付されている。対象としている文法事項のうち動詞について見てみると、時制は現在形、法は直説法のみならず接続法も含まれている⁷⁹。今日の大学で使われる初学者向けテキストとほぼ同じ文法事項の量と考えてよいであろう。ただし、文法事項の進度はきわめてゆっくりとしている。全体の24番目、構文篇の14番目の第二十四講で初めて否定文・疑問文の作り方が扱われている。

本書にもとづいて文法教育がおこなわれたと仮定したばあい、一年で本書を終えることは可能であろう。先述のとおり、本書で扱う文法事項は現行の初学者向けテキストとほぼ同じである。また授業時間数についても、現行と同じである。本科一年生の一学期間のスペイン語授業時間数は、18週で50分授業が週3回なので45時間となるのに対し⁸⁰、今日の大学では一般的に1セメスタ15週で90分授業が週2回なので45時間となる。本科一年生のばあい、一学期あたりの授業時間数そのものは今日の大学と同じなのである。

したがって、一年生で文法を終え、二年生以降で読解や会話を学習するという、後期の東京外国語学校のスペイン語教育モデルは山口高商でもあてはまる。もちろん、学習の深度は比すまでもないが、一年生で最低限の文法事項を身につけ、二、三年生でそれを発展させることはじゅうぶんに可能であった。藤原や笠井の著作にしたがって推測すれば、学生たちが身につけたのは初級レベルの文法内容と日常における最低限の会話能力、それに中南米諸国、特にアルゼンチンにおける風俗といったところである。スペイン人教員もいた山口高商のばあい、聴解能力も身につけることができたであろう。しかし所蔵図書からみて、スペイン語の授業をとおしてスペイン語圏文学

⁷⁸ 同書が戦前期に何番目の版まで出されたのかは不明だが、同書は1960（昭和35）年に改訂がほどこされて改めて「初版」として出版された。したがって、これ以降に出版されたものを「戦後版」、これより前を「戦前版」と位置づけることができる。「戦後版」においては、旧字から新字への変更以外に構成にも手が加えられ、「戦前版」の全40講から全38講となっている。

⁷⁹ ただし、接続法については活用の説明と名詞節に接続法が現れる事例のみが示されているにすぎない。「要するに、たれそれが何々することを別のたれそれが願ったり、頼んだり、命令したり、疑ったり（其他上に列挙した動詞）する場合に限って、” que ”（…することを）の後に接続法を用いねばならぬといふこととなります。」 笠井 鎮夫 *Primeras Lecciones de Español*、第4版、1951年、176頁。

⁸⁰ ここでは、山口高等商業学校『学校一覽』（自昭和16年4月至昭和17年3月）に記載されている学期および学休期にもとづいて計算をおこなった。

や文化といった教養を学ぶことはなかったと推察される⁸¹。山口高商におけるスペイン語教育は実用指向であったと考えられる。

ほかの学習書に目を向けたばあい、その実用指向が「読み書き」ではなく「聞く話す」こと、すなわち会話を主体とするものであったことも見える。⑥⑧という読本教材もあるが、⑥の坂本静雄『実用スペイン語読本』は全編スペイン語で書かれており、藤原や笠井の著作のレベルからは離れすぎている。⑧の笠井鎮夫編著『実用西語読本』は書翰、あいさつ・演説、新聞記事・論説の三部構成になっており、⑥に比べれば平易な文章も含まれているため、テキストとして使用することも可能であったろう。しかし、実務で使うにたる読み書き能力の養成には向いていない。実務に直接かかわるような学習書、たとえば笠井の『新選西語商業通信』は、小樽や横浜の両図書館に所蔵されているにもかかわらず、山口にはなかった。商用文書の読み書きまで進むことができなかったか、教員の能力を超えていたのか、あるいは、スペイン人教員がいたがゆえに会話能力に重きを置いたのかもしれない。

山口高商のスペイン語教育で目指されていたのは、藤原の著作が示すように、スペイン語圏の中南米諸国に赴いたばあいに必要となる会話能力、最低限のコミュニケーション能力を養成することであったと考えられる。

おわりに

戦前の高等教育にかんする歴史研究において特段の注目を集めてこなかった高商史、そのなかでさらに関心が向けられてこなかったスペイン語教育については知られていないことが多い。そのいっぽうで戦前期のスペイン語教育にかんする研究においても、外国語教育を専門にした外国語学校に視線が集中し、多くのばあい「第二外国語」のひとつとして教授された高商での教育は論じられることがなかった。しかし、高商でおこなわれたスペイン語教育について探求することは、単に戦前期におけるスペイン語教育の広がりや高等教育におけるスペイン語教育の位置づけを明らかにするにとどまらず、明治以来の日本と中南米諸国との関係史、日本におけるホワイトカラーの育成システムなど広い意味の戦前の労働史あるいは戦前の日本経済史や経営史、そして思想史を考えるうえでも、また移民史研究に新たな局面を開くためにも重要な役割をはたしうるものである。

⁸¹ 山口高商の蔵書にはスペイン語圏の文学作品は、英語版の『ドン・キホーテ』しかなかった。

じっさい、「（東京）高等商業学校」でのスペイン語開講は明治20年代に隆盛した、最初期の「南進論」や「海外殖民論」と関係していると考えられるし、1930年代前後に横浜、小樽、高岡、山口の4つの高商でスペイン語教育がはじめられたことは、1929年に始まる世界恐慌の影響が日本に及んだことと無関係ではない。

こうした時代背景や社会情勢・国際情勢のなかで開始されたスペイン語教育は、英語、ドイツ語、フランス語といった「教養語学」の教育ではなく中国語や韓国語などのような「実用語学」のそれであった。たしかに、東京外国語学校に目を向けてみても、外務省や実業界において使用に耐えうるスペイン語能力を身につけさせ、そのスペシャリストとするべく学生を教育していた。ただそのいっぽうで、ひとつの語学を集中的に学ぶ外語においてはスペイン語が、文学作品等の教授をつうじた「教養語学」としての側面も持ちえていた。それにたいして高商においては、「教養語学」としても教育を受けた東京外国語学校の卒業生が教員であったにもかかわらず、スペイン語を話す国々、とくに中南米諸国における日本企業の先兵となるべき人材の養成に終始したように思われる。実学を旨とする高商であれば当然のことかもしれないが、スペイン語は単なる「実用語学」にとどまっていたようである。

しかし、本稿は研究のほんの入り口に立ったにすぎない。なお授業の具体的な内容に踏みこめてはいない。高商に関する史料が比較的多く保存されていると思われる山口高商の調査をとおしても、授業の内容はおろかテキストさえも確定できていない。今後、横浜・高岡の両高商について調査しても史料の隘路から抜け出せないかもしれない。ただ小樽高商の卒業生による回想は、高商におけるスペイン語教育が単なる実学教育ではなかった可能性を示している⁸²。この点については、横浜・高岡の両高商にかんする調査とともに、今後の課題となる。

⁸² 林 利宗 「花村哲夫先生の思い出—先生との出会いの風景—」 『小樽商科大学同窓会報 緑丘』第80号、1996年8月26日、27-30 頁。小樽高商のスペイン語教員であった花村哲夫を回想するこの文章において林は、花村の授業が英語教員浜林生之助と同様であったと記している。「語学の小樽高商」の看板を担ったとも言われる浜林と同様の授業であったとすれば、実学偏重ではなく教養的要素をもった授業が展開された可能性はある。

〈戦前に出版されたスペイン語関連蔵書リスト〉⁸³

【小樽高商（小樽商科大学）】

〈和書〉

村岡玄編 『いろは音引 和西會話辭典』 東京西班牙語学会、1925年。

笠井鎮夫 『西班牙語四週間』 大学書林、1933年。

太田兼四郎 『西班牙語廣文典』 岡崎屋書店、1937年。

笠井鎮夫編著 『新選西班牙語商業通信』 第三書房、1938年。

進藤遠 『入門西班牙語』 三笠書房、1942年。

〈洋書〉

C. Bustamante y M. Clifton, *Manual de la conversación y del estilo epistolar para el uso de los viajeros y de la juventud de las escuelas : Español-Inglés con la pronunciación figurada en Inglés*, Paris, 1915.

C. F. Michale, *Commercial Spanish*, Boston, 1918.

Arturo Cuyás, *Appleton's new English-Spanish and Spanish-English dictionary*, revised and enlarged by Antonio Llano, New York, 1928.

Pedro Clerget, *Elementos de economía comercial: la técnica de los negocios*, traducido de cuarta ed. francés a español por José Zandrera, Barcelona, 1930.

John M. Pittaro and Alexander Green, *Primer curso de español*, Boston, 1938.

John M. Pittaro and Alexander Green, *Segundo curso de español*, Boston, 1939.

C. E. Kany, *Advanced Spanish Conversation*, Boston, 1939.

Th. Scheppelmann, *Duden español : diccionario ilustrado de la lengua castellana : adaptación española del "Bildwörterbuch de Duden"*, Leipzig, 1940.

John M. Pittaro and Alexander Green, *Modern Spanish Grammar*, Boston, 1942.

Fletcher Ryan Wickham, Arthur L. Campa, George I. Sánchez, *Practical handbook of Spanish commercial correspondence*, New York, 1943.

⁸³ データは各大学図書館web上の所蔵図書検索の結果である。したがって、高商期の蔵書なのか戦後に購入・寄贈されたか等については未詳である。

G.R. MacDonald, *Spanish-English and English-Spanish commercial dictionary : a comprehensive vocabulary of words and expressions current in the english and spanish languages and more particularly of those used in commercial correspondence, as well as technical and engineering terms, etc.*, London, 1944.

【横浜高商（横浜国立大学）】

〈和書〉

ヴィリアーズ・ウォーデル 『西班牙人の西班牙』 大日本文明協會編輯、1911年。

照井亮次郎 『西日辭典』 右文社、1925年。

村岡玄 『西和熟語慣用句辞典』 東京西班牙語学会、1929年。

笠井鎮夫 『西班牙語四週間』 大学書林、1933年。

佐藤久平 『スペイン語第一歩』 白水社、1934年。

笠井鎮夫 『実用スペイン語会話』 大学書林、1936年。

ファン・カルボ 『日西大辞典』 三省堂、1937年。

笠井鎮夫 『新選西班牙語商業通信』 第三書房、1938年。

國澤慶一編 『西班牙語基礎1500語』 大学書林、1940年。

〈洋書〉

Arturo Cuyás, *Appleton's new English-Spanish and Spanish-English dictionary*, New York, 1922.

【高岡高商（富山大学）】

〈和書〉

照井亮次郎 『西日辭典』 右文社、1925年。

笠井鎮夫 『西班牙語四週間』 大学書林、1933年。

笠井鎮夫 *Primeras Lecciones de Español*（『基礎スペイン語』） 大学書林、1938年。